

じゃりみち



…仮設支援情報…

第30号 発行日 1996. 11.21

阪神・淡路大震災

「仮設」支援NGO連絡会

〒653 神戸市長田区御蔵通5-5

TEL: 078-578-6921 / FAX: 078-578-6923

E-mail: ngoteam@mb.osaka.infwweb.or.jp

口座番号: 01180-6-68556 (郵便振替)

決闘全体会のお知らせ

ついにじゃりみち30号です！拍手!!! さて次回全体会のお知らせです。今回は事務局の隣のプレハブの2階で行います。第4週ということで、参加団体さんの司会進行です。今回は長寿社会文化協会（WAC）の町野さんに司会をしていただき、最初の1時間は町野さんからの提案の「自己表現」の方法と発表、ディスカッションを行い、そのあとは前回行ったテーマごとの話し合いと、冬対策について、もう一度話し合います。

11月28日（水） 18:30～

「仮設」NGO事務局隣のプレハブ2階にて

全体会の報告

前回の全体会は、村井くんの司会で行われました。最近感じていること、思っていることなどをテーマを決めずに出してもらい、その中からキーワードを拾い出して、それについて自由にグループディスカッションをしました。どんなキーワードが上がったかというと、

- 1、歩行者優先の考え方（私たちの活動の基本姿勢 by村井）
- 2、後方支援をどうしていったら？
- 3、先が見えてこない、活動をしていくことの不安、続けることのしんどさ、ボランティアと被災者の共生をどうしていけば？
- 4、自治会の総入れ替え、公営住宅に移る人、仮設住宅に残る人。
(他にもたくさんでしたが、今回はこの4つに絞ってみました。)

自由に話し合った中で出てきた言葉は・・・

1、歩行者優先という基本姿勢。「赤信号は誰のためにあるのか？」…車のためにあるのではなく、「歩行者」のためにある決まり。＝人に対する思いやりと関係するのでは？私たちの基本姿勢でありたい。

3、これからボランティアはもっと減っていく。各団体同士のより一層の連携が必要に。情報交換の大切さ。これから公営住宅という課題も入ってくる。どこを拠点に??長期化する課題・資金的な問題。「ボランティア無償論」に無理が生じてきている。でも世間では…。仮設住宅に残る人たちの不安を行政が安心に変えていく必要性。できることから根本的なことを話し合わねば。

2、後方支援というと「物を送る」としか考えられないのだが、他にどのような方法が?…現地と後方の情報の伝達の仕方の工夫（先を見越しての支援）が必要。後方支援の人たち自身の地域でのバックグラウンドがないことからの課題の伝えにくさ（現実味がない）。これらをどうクリアしていこうか…?

4、自治会の入れ替わり。なぜ自治会と住民の間に溝ができるのだろうか?「仕方なくやっている、なぜここまでやらねば?」という自治会役員の心の負担も原因?できる範囲でやっていくことの大切さ。ボランティアも自治会も気張りすぎずぼちぼちやっていこう。

といった感じでした。少ししか時間がなかったので話したりないところもあったのではないかと思います。それぞれに各団体の姿勢や悩みなどが少し見えたのかな? と思いました。なかなかいい雰囲気だったので、次回も同じ様な形式でグループディスカッションをしてみようということになりました。またこの他には、「2回目の冬をどうするのか?」といったことも話し合われ、仮設住宅のすきま対策や、火災が続くことの注意の呼びかけ、暖房器具の提供のお願いなどがあがりました。これらも次回の全体会でもう一度きちんと詰めることになりました。

コタツや布団など、暖房器具下さい。ございましたら事務局までご一報下さい。

< 仮設は今... >

11月の雨の降るある日、仮設住宅の写真を撮りに、いくつかの仮設住宅を回っていました。平日の昼下がりに、別にボランティア活動をしている人がいるわけでもなく、雨が降っているからか誰も外に出てくる様子もなく、とても静かな日でした。

いろいろ仮設住宅を回っていて思ったのは、全体的に空き仮設が目立ってきたということ。神戸市内では、来年から仮設住宅の統廃合が始まります。「それまでに仮設住宅から出られるめどが立っていないければ…」という方々のことを考えると、ただただため息だけがもれてしまいます。

そんなこんなを思いながら、西区にある仮設住宅に着きました。そこのふれあいセンターに挨拶をして仮設住宅の周辺やらの撮影に入りました。けれど雨が強くなってきてしまい、一時ふれあいセンターに雨宿りをさせてもらうことにしました。そこで見たのは、仮設住宅に住んでおられる方々が5～6人くらいで集まって、ワイワイ言いながら手芸を楽しむ姿でした。そこには、別に何かがどうというものではないのですが、物をつくる楽しさ、つくる喜びを顔いっぱい現しているおばちゃんたちの笑顔がありました。仮設住宅がとか、そんなことではなく、人が生きていく本質的な姿を、生きている「気持ち」というものを久しぶりに実感できたような気がしました。

今日、いつも通る道程でふと顔を上げると、ビルの向こうにボウリングのピンが立っていました。きっとこの近所に新しいボウリング場ができたのでしょう。その時思ったのは、いかに自分が下を向いてというか、うつむいて歩いていたのかということに気づかされました。僕もまだまだです。な～んて。まだまだこれからですよ！

事務局 鈴木隆太

がしキは走る

(全国キャラバン日程表)



11/18～24	愛知県	豊田市	憩いの家	がしキ・パ・レ	(23日シホ・石井)
11/23	高知県	西土佐村	健康まつり	講演	(村井・喜多村)
11/23	東京都	台東区	区社協	シホ・スライド	(中溝)
12/6	東京都	豊島区	立教大クリスマスバソ	講演・スライド	(神田神父)
12/7	東京都		明星大学	シホ	(石井・浅野・田中)
12/14	広島県	芦品郡	チャリティーコンサート	講演	(石井)

このあとは1/17に向けて 各地いろいろ準備中!!

※浅野：SVA神戸事務所 田中：まちづくりセンター事務局 中溝：POCO a POCO鷹取 神田神父：鷹取カトリック教会
会場、時間など詳しいことに関しては「プロジェクト結ぶ」の石井 布紀子さんまで。
プロジェクト結ぶ：0798-64-5829 (FAX 0798-65-5254)

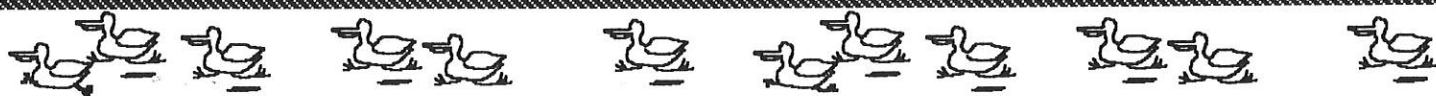
助成金が出ます。

震災の被災者の生活復興をめざして活動するグループに、30万円までを50団体に助成。12月から来年度3月までの、

- ・バザーやリサイクルショップの開催など被災者の生きがい創造などを目的とした活動
- ・恒久住宅移行者の周辺住民との交流会や高齢者の引っ越し手伝いなどの支援活動
- ・手作り情報紙の送付など県外被災者支援活動

の4種類の活動が対象。消耗品購入費や原材料費として助成する。ワープ購入費や人件費などは含まれない。ほかの公的助成を受けている場合も対象外。

受け付け：12月6日まで 問い合わせ：生活復興県民ネット事務局 078-393-7625



未使用

てれふおんカード、く・だ・さ・い♡

11月21日現在 240枚集まりました!! ありがとうございます。引き続きお願いいたします!

災害時のアメリカのNGO団体の活動 本間 玲子

28号の全体会の報告のところにも少しお話を載せました本間さんに、お忙しい中、無理を言って書いていただきました。本間さんはサンフランシスコ大地震の時に精神保健部長として活動をしてみえました。その時のご経験から感じたことを書いていただきました。

私は、10月に開かれた「仮設」支援NGO連絡会の全体会に飛び入りで出席させていただき、参加団体のみなさまたちが活動面で多くの壁に直面されながら努力されておられる一面をうかがえ、感激しました。

1958年にアメリカ、サンフランシスコに移住した後、30年以上の長い間、精神保健関係の仕事に関わっております。ボランティア活動に関しては、日本で高校時代のときから続けておりました。1989年にサンフランシスコ近辺を襲った地震の際、私は市の精神保健部長として行政の立場から、必死になって災害後のこころのケア活動のネットワーク作りに努力しました。そしてその後、1995年に起こったロサンゼルス大震災の援助にも関わりました。その際に痛感したことは、災害の際の「援助活動のネットワーク作り」の大切な一面は、多数のNGO団体、中でも特にNPO（非営利組織）団体の参加や協力がなくては実現できなかったということでした。

アメリカでは年間約3,500～3,700件という大小様々な災害が発生していますが、そうした際の援助対策の原則としては、第一義的な責任は地域社会や自治体が負うことになっています。災害レベルが高く、地方自治体の手に余る場合に、州政府が援助をし、それでも不足な場合には連邦政府が介入することになっています。しかしいずれにしても政府や行政の力だけでは緊急に災害援助活動などは機動できるものではないこと、そしてNGO団体の協力が必要であるということを行政は率直に認めています。そういうことから、NGO団体がスムーズに活動できるように法律的にも実質的にも、日頃から色々な援助を行っています。また、さらにアメリカでボランティア団体の活動が促進された一つの理由は、法律的に多数のボランティア団体をNPO（非営利）団体として認可し、それによる団体の収入の非課税、団体に個人または企業が寄付した場合の金額の所得税や法人税の控除を可能としていることにあります。

全国的にアメリカで災害援助活動を行っているNPO団体は、現在26団体あるといわれていますが、その中でも最もよく知られている団体はアメリカ赤十字です。全米に2,600の支部があり、ボランティア140万人の登録を持ち、2万人以上の有給職員を雇用しながら、年間5万5,000件の援助活動を行っています。災害時にいち早く避難所を設立、運営し、医療・衣食料の援助を提供するのが主な活動です。そのほかにも多数のNPO地域団体が各地域の独特なニーズに沿った援助活動を行っています。その数は全米で1989年には46万件を上回っています。活動範囲も広く、福祉、教育、医療、精神衛生、食料援助、老人援助、障害者援助などと、多範囲にわたっています。

これらの活動はいくらボランティアを使っても、やはり少なからず運営資金が必要になります。活動資金源の一部は民間から寄せられる寄付金によって調達されていますが、少なからずの資金が地方自治政府や行政から委託事業として出資されています。このように、行政はNPO団体の貢献実績を尊重し、できるだけその力を支援していく方針を取っているのです。

日本でもこの度の阪神・淡路大震災の際には、多くのボランティアや団体が活動し、注目されました。しかし、その活動を支持するための、行政からの実質的な援助は現在非常に限られているようで残念です。また、いま国会でNPO法案が検討されているようですが、その法案がなかなか受け入れられず、さらにその中に盛られた寄付額の免除に関する優遇税制措置に関わる提案が削減されようとしているということも報道されています…。

行政には、NGO団体が活動しやすい支援体制を作り上げていていただきたいと思っているのですが、それにはますますこの阪神・淡路大震災で活躍されたNGO団体の皆さんたちの積極的な呼びかけが必要なようです。私たちも遠いアメリカからですが、これからも協力させていただきたいと思っています。

「がんばってますKOBÉ」ご協力下さい！！

せがく自立していこうと店を建て直しても、多くの人が亡くなり、そしてまた郊外の仮設住宅や県外に避難してしまった、人のいない街では収入が得られません。これではいっこうに被災地は復興できません。…そこで、そういった被災しながらも店を建て直し、がんばって商売を再開したお店の商品をカタログにし、通信販売を行うことにしました。それを注文していただくことで被災地にエールを送ってください！

詳しくは一緒にお入れしたカタログを見ていただくが（数の関係上お入れできなかったところもありますごめんなさい!）、「がんばってますKOBÉ」カタログ請求先に直接請求して下さい。

〒653 兵庫県神戸市長田区長田町1-3-1-224号 長田神社前商店街振興組合

TEL 078-691-2914 FAX 078-691-2005

また、この活動の運営資金のカンパを募集しています。チラシ代、郵送料だけでも送って頂ければ助かります。

郵便振替口座番号 01160-4-115582

口座名義 がんばってます KOBÉ 実行委員会

孤独死を考える

「ふるさとに帰りたい・・・」

毎日新聞（11月19日）より抜粋

11月18日午後、兵庫県西宮市の仮設住宅に住む無職の男性が自室で左胸にナイフが刺さった状態で亡くなっているのが発見された。「私が死んだら年金が入るのでみんなで使って下さい」という内容の、約10年前に離婚した妻と子どもあての遺書が室内にあり、警察署では自殺と見ている。調べでは彼は独り暮らし。慢性心筋こうそくで今月はじめに同県尼崎市の病院に入院。先週にも病院で睡眠薬による自殺未遂を起こしたという。この日の昼ごろ、「ふるさとに帰りたい」などと言いだし、病院では仮設住宅へ一時帰宅させていたという。

「何でなのかわからへん。ずるずる飲んでしまうんや」

毎日新聞（11月19日）より抜粋

「遠くの仮設住宅には住みとうない。誰も来んやろ」と、神戸市長田区の公園に建てたバラックで避難生活を送る独居男性（51）は言った。「あいつの部屋にも酒瓶がころがってたな」—おなじ公園内で死んだ独り暮らしの仲間に思いを馳せるようにガラスコップに日本酒を注ぎ、のどをしめらせる。

社会との接点を消し、仮設住宅で死後10ヶ月で発見されたYさん（38）も、アルコール依存症だった。「大声を出したり暴れたりする『酒乱タイプ』ではなく、『静かなアル中』。周りも気に留めなかった」と当時の自治会長。だが、その死後にいくつかの「サイン」があったことに気づいた。「においがする」との連絡で、何度か足を運んだが、「潮のにおいか、ゴミのにおいか、わからなかった」。同じ棟の女性も「県から配られた餅の引換券が、昨年末から扉にはさみっぱなし。蛍光灯もついていた。警察にも何度か連絡したんやけど」と証言する。

この仮設住宅の入居者は行政が言う「社会的弱者の優先枠外」の働き盛りの男性で、仕事で留守がちの人も多い。にもかかわらず、Yさんのように、扉を閉ざしたまま6人が孤独死、1人が自殺している。

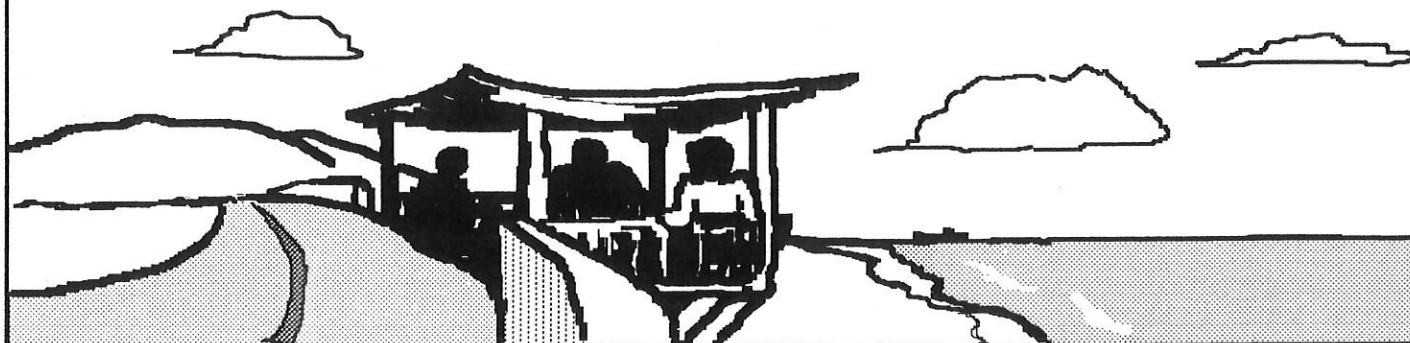
Yさんの遺体が見つかった翌日の9月30日。市は重い腰を上げた。単身世帯の緊急安否確認調査と、応答がなかった世帯への錠を壊しての踏み込み調査の開始である。しかし、調査の結果は「無断退去」や「荷物置き場」ばかり。行政と住民の意志疎通の希薄さを見せつけた。「高齢者中心の安否確認には限界がある」との指摘は以前からあった。なぜ今になって？「市は住宅のハード面ばかりを取り繕い、そこに『人が住んでいる』とは考えていない。プライバシーも大切だが、命はもっと大事なのに」。仮設住宅で在宅ケア活動をする阪神高齢者障害者支援ネットワークの看護婦黒田裕子さん（48）の涙声は怒りに震えた。

同市西区の西神第7仮設住宅で約1年前から断酒会を兼ねた「アルコールに関するミーティング」が開かれている。集まった十数人は50歳前後の男性ばかり。

担当の土井寛子・市精神保健福祉相談員は「街から離れて外食がしにくい—作ってくれる人もいない—保存のきく酒類で腹を満たす—食わずに飲むと、急速に内蔵を悪化させる」と酒の背景と危険性を指摘する。が、孤独な心のすきまに酒がはいり込む。カギをかけ、昼間もカーテンを閉め切った暗い部屋。コップ酒を手にもつづいた。「何でなのかわからへん。ズルズル飲んでしまうんや」

…つい最近久しぶりにテレビを見た。映し出された画面にはきれいな沖縄の景色。少しずつ失われるこの風景や人々の伝統をカメラに写したいという、あるカメラマンのドキュメントなのだが、最後のほうで海に面した道路に作られた、ほったて小屋のような、屋台のようなところで、村の老人たちが酒と海の幸を片手ににぎやかに話し合っている風景があった。ここに集まることが日課になっているようなその風景は、自然にできたコミュニティの象徴のように見えた。今日起こった出来事、思ったこと、悩んだこと……。そんなことを話し合える場が生活の中にきちんと設定されているのだ。はたして今の私たちの生活にはそんな空間があるだろうか？それはきれいな部屋じゃなくてもいい。広くなくてもいい。人が自然に集まればそれでいい。そんな場所があるこの風景がとてつもなく羨ましかった。……しかしそこももうすぐ道路拡張のために取り壊される予定なのだそうです。

事務局 山田 光



ふきちゃんのキャラバン日記

プロジェクト結ぶ 石井布紀子

3回目の1月17日をどう迎えようかな? その3

前回、前々回に引き続き、1月18日～19日に予定している防災フォーラムの準備プロセスについてご報告させていただきます。

全国各地から、なんと300台のトラックが「れっつら KOBE」の黄色いステッカーを車体に貼り付け、同じ想いのトラック野郎とともに被災地入りするほか、有森裕子さんと間寛平さんが中心となつてのトークショーや、コープこうべボランティアフェスティバル会場での盛りだくさんの企画などなど、ワクワクするイベント開催にむけて、準備が進んでいます。これらの詳しい内容は、今回のじゃりみちと一緒に同封されたチラシに掲載され

ていますので、是非ともご覧下さい。いくつかの仮設住宅のふれあいセンターでは、すでに市民文化祭にむけて手作りの品物の作成や収集がはじまっており、当日はたくさんの作品がメイン会場にもふれあいセンターにも飾られて、「フォーラム」の華となるのでしょう。私は西宮市での呼びかけ人を引き受けたばかりに、みなさんより一足お先にこれらのステキな作品の存在を知ることができ、ちよつと得した気分になっています。「いったいど

うすれば、市民と企業とNGOが一緒になり、そしてあくまでも被災市民の声や力が中心となつてのイベントにしていけるんやろか?」と模索するうちに、少しずつ、少しずつ、市民の力が具体的な形となつて集まりだしたのかも……。確実に、気持ちのよい可能性にあふれた、出会いの場が実現する予感が広がっています。そして震災や被災への関心がどんどんうすれていると言われる社会状況の中で、「本当にこのままでいいのだから

か?」とか、「自分たちのくらしをこのままにはしたくない、できることなら何とかしてみよう!」という気持ちとも出会えるように思います。さらに、先日11月9日&10日に、SVA(曹洞宗国際ボランティア会)神戸事務所にて、「全国災害ネットワーク発足準備会」が行われましたが、私はその場に参加して、栃木や福島や長野や神奈川などでも、連動した取り組みとしてのイベント開催準備を進めて下さっているというお話をうか

がいました。改めて、「このフォーラムを手段として、何ができるのか?何をしたいのか?」を自分に問いかけ始めている私です。

とはいえ、前むきな報告ばかりが問いかけを生み出しているきっかけではありません。もともとこの第2回市民とNGOの「防災」国際フォーラムは、昨年に第1回が開かれた時に提案された「神戸宣言」を、さらに具体的に示す「復興計画案」として、市民とNGOが力を合わせて作り上げていこうといつ

たねらいのもとに発足しました。ひとり一人の生の声を記した「声のカード」を収集・分類して、10項目のシンポジウム会場に届け、様々な角度から具体策を提示しようと準備をすすめています。このような試みは、奥尻や雲仙での自然災害被災地でも見られなかったはず。被災地神戸での現存課題をどうとらえ、そしてどのような展望につなげてゆくことが可能でしょうか?…この答えがそんなに簡単に見つかるとは思えません。

私自身「声のカード」を集めはじめてみて、被災者の現状における困難や厳しさを再認識し、何とも言えない無力感やわからなさの中に広がっています。「いったい被災弱者って誰? 大変な人ばかりじゃないかも知れないからこそ、街の中に潜んでいる大変さともつきあう努力を続けていきたいな。」ただ、大変さとしつかり向き合いながら、楽しさを探していく仲間の輪は、そう簡単には広がらない!?…いやそんなことはない!?

できることなら絶望感から希望が生まれるような「復興計画案」を些細な日常の暮らしの一角、ひとこと一言を基本に作り上げたい。ちよつと夢みたいな話ですが、きつとやれるはずだと私は信じています。フォーラムではこれらの場に立ち会って下さる方を募集中だそうです。もちろん率直なあなたの声も募集中。どうぞ気軽にアクセスして下さい!!



ではこのつづきはまた次回に。

なんでや！ 居住権を考える

27号で載せた村井くんのハビちゃん講座「人間みな同じや！」を読んで下さった愛知県在住の県外避難者である西田さんの寄稿を転載します。（震災から学ぶボランティアネットの会 機関紙より抜粋）

「居住の権利」という言葉はふだんほとんど使われることもなく、全く知らない人も大勢いると思われます。そこで今回、自分なりにまとめてみました。

例1

私の義妹たちは震災当時、神戸市内の県営アパートに住んでいた。一時は避難したが、階段を取り替えれば入居可能とわかり、県の手で工事が進められた。それが終わった現在では元のところに戻っている。

例2

従兄夫妻の住んでいた市営のアパートが崩れ、彼らは仮設住宅に避難した。建物は撤去され、跡地に再建中。来春には完成の予定だが、希望者は全員もとのところへ帰ることができない。

このように震災当時公営住宅に入居していた者のすべてに「居住の権利」は保障されています。

では同じように被災して、仮設住宅で生活しておられる人たちはどうでしょうか？行政側は1999年度中には移住を完了し、仮設住宅を閉鎖すると公言しています。しかし、前に述べた人たちのように元のところへ帰ることは不可能だからと、次善の策としてアパートを希望したとして、その希望場所に確実に入居できるかというと、そういう保障はどこにもありません。希望者が多ければ抽選で決めます。便利の良いところほど人は殺到します。そうなれば全くの運だのみです。

神戸市の西のはずれに「姥捨て山」と呼ばれている仮設住宅があるそうです。市街地の仮設住宅の人口が次第に減るのに反して、不思議なことにこの仮設住宅では入居者の数が少しずつ増えてきているのです。それは市街地の仮設住宅から身障者や老齢の独居者を連れてくるからです。行政側に見れば1ヶ所にまとまった方がお世話するのに便利だからとのことですが、市街地の仮設住宅を訪れた人たちにこの人たちの惨めな姿を見られたくないのが本音のようです。

確かに新しいアパートの群れは建設されています。そして入居者の募集も始まっています。一見仮設住宅に住む人たちに「居住の権利」が保障されているように見えますが、前述のごとくその権利は内容において大きな差が認められます。

これまでにこの問題を取り上げた人もないようですし、また取り上げてどうなるものでもないかも知れません。けれど、私はこの矛盾に大声で「なんでや！」と叫びたくなります。

インド南東部の豪雨災害に対する緊急救援活動へのご協力をお願い

11月6日に発生したインド南東部アンドラプラディシュ州における豪雨災害の緊急救援募金をいたします。
みなさまのネットワークにも呼びかけて下さい。

第1報（毎日・読売・時事通信より）

サイクロン（熱帯低気圧）による豪雨が11月6日、インド南東部アンドラプラディシュ州を襲った。死者はこれまでに判明しただけで710人、行方不明者は900人に達し、倒壊家屋や作物などの被害相当額計504億ルピー（日本円で1,012億円）に達したとのこと。また、死者数は最終的には2,000人に達する可能性があるという。この豪雨により4mの高波で300以上の村が浸水し、強風で1万戸が倒壊した。それにより、50万人が洪水で生活不能の状態である。

同州のナイドゥ首相は「3、4万軒の家屋が倒壊しており、死者1万人以上を出した1977年のサイクロンよりも被害は深刻だ」と述べた。

「サンガム」の会とは1993年に岐阜県高山市に設立された海外協力のNGOです。現在CSSSを通じて、同州スリカラム県の山岳民族・不可触民と呼ばれる農村の貧困層の自立のために、収入向上・識字・植林など様々なプロジェクトを実施しています。

CSSSは1978年に設立され、同州スリカラム県の75の村で、特に山岳部族の人たちの自立と開発のために、識字・植林・保健・地域開発及び民衆の組織化災害救援活動などを続けています。今回の募金は、特に被害が大きい同州東部海岸線沿いの村々での緊急援助並びに復興活動のために用いられます。

この救援基金は、サンガムの会を通してインド・アンドラプラディシュ州にある非政府組織（NGO）「農村総合開発協会（CSSS所長ラマ・ラジュさん）」に送られます。

募金の送り先

口座番号: 00970-7-39728（郵便振替）
加入者名: 阪神大震災地元NGO救援連絡会議
注: 通信欄に、
「インド南東部災害」とお書き下さい。

連絡先: 阪神大震災地元NGO連絡会議
阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会
事務局 鈴木まで

〒653 兵庫県神戸市長田区御蔵通5-5
TEL 078-578-6922 FAX 078-578-6923

阪神震災地元NGO救援連絡会議 代表 草地賢一
阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会 代表 村井雅清